

河野菜穂*

○金田利子**

(*京都教育大、**静岡大)

目的 家庭や社会での性別役割分業の問題がまだまだ残存しているが、さまざまな認識を自然に形成する時期にある子ども期（ここでは乳幼児～小学生）に出会う文化財は、その在り方によって、分業意識の促進を助長するものになりかねない。ここでは、家族を扱った絵本に焦点を置き、子どもにとっては父母にあたる夫婦がどのように描かれているかを明らかにし、性差別と結合したジェンダー（文化としての性）の子ども文化における実態に迫り、子育て文化の改善の方向を見いだす手がかりとしたい。

方法 静岡市立図書館（市内市立全図書館合同）に蔵書された1000種の絵本のうち家族の描かれた絵本のすべて（63冊）を対象とし、活動別に夫婦・父母の描かれ方を分析した。具体的には、1）性別役割分業の状況がどの程度どう描かれているか、夫婦の仕事と家庭の分業あるいは共同の側面、および、家事労働へのかかわり方、家族の世話活動へのかかわり方、余暇的時間のようす、姿勢・居場所・振舞いのようす等、家庭での生活行動の側面から、また2）親としての母性意識の強化についてはどうかという点から父母の親としての分業あるいは共同の描かれ方をカテゴリー抽出法によって分析した。

結果・考察 1）性別役割(社会的仕事と家事の分業・共同)の面においても、2）親としての在り方においても、極めて不平等的な描き方になっていることが明らかになった。絵本は、現実の反映であり実態からそう離れたものを描けないということもあり、描き手だけの問題とはいえないが、生活者の側と文化財の作り手の側との共同により、男女平等をすすめる視点から乳幼児文化財としての絵本の内容を吟味していく必要が示唆された。